

異文化環境における個人の 心的過程モデル ——「境界人」の理論の発展にむけて——

村田 雅之

異文化環境における意識励起によって、主観的世界の認知要素間のズレは膨張していく。この「自他関係定位的ユニット」の衝撃によって、アイデンティティは変容、あるいは硬化へのレディネスを有するようになる。臨界点を越える振動によって生ずる自己意識の浸食に対し、内在化—統合をなすことで、アイデンティティは、自己と他者（社会）との関係を組み込みつつ、弁証法的に再構成される。維持機構によるアイデンティティの硬化・反発は、現況の継続と引換えに、社会的関係疎隔化等の要因となりうる。また、自己の混沌化と記号化の力動的関係、および様々なポジティブ・フィードバック機構は、心的過程全般において、重要な役割を果たす。なお、上記の全過程は、無限の連続性および循環性を有する。

I. はじめに

文化が異なる環境に在ることに帰因する、個人の心理的な境界性と、それに基づく諸行動は、文化と人間との関係を考察するうえでの、重大な議題のひとつである。本論文では、この個人レベルの心理的な境界性に着目する。

まず、異文化環境に在る人は、客観的環境だけでなく、主観的環境においても、「境界人」になる、と捉える視角を、議論の基礎に置く。そのうえで、個人と社会との間の不調和、およびそれに伴う心的過程について論ずるものとする¹⁾。

II. 基本的視角

1. 研究の状況

(1) 異文化移行者に関する理論的研究の状況

異文化環境に在る、あるいは移行するということは、意識上での様々な変

化をもたらす。しかし、移行に伴う心的過程についての理論的研究は、未だ少ないといえる。

異文化移行者の心理的境界性や不適応と関連が深い「カルチュア・ショック」に関しては、比較的多数の既存研究がある。そこでの議論においては、「疎隔感」「被拒絶感」「違和感」等といった用語がしばしば用いられ、存在する「場」に対する「溶け込み不能感」、いわば「なじめなさ」が、かなり一般的な共通要素として抽出できる。それにもかかわらず、この「なじめなさ」の構造に関する研究はほとんどない。また、移行者の自己意識の形成、アイデンティティの変容などに着目した研究は、未だ少ないのが現状である。

(2) 異文化接触に関する既存研究の一般的傾向

さらに、異文化接触に関する既存の研究においては、一般に、

1. 接触事態の記述が多く、理論面が弱い
2. 特定文化間でなく、異文化の問題に共通の枠組を持つ研究が少ない
3. 個人の心理的境界性の、認知論的側面からの考察は少ない
4. 議論の軸となるべき理論的モデル構築の試みが少ない

などの傾向がみられる²⁾。

2. モデル構築の意義

このような状況のもとで、個人の認知的世界における自己意識の形成や、アイデンティティ変容の心的過程について、異文化の問題一般に適用を志向し、心理的側面を力動的に探究する理論的なモデルを構築することは、意義のあることと考える³⁾。

そこで本論文では、認知論的な視点から、異文化環境における心的過程モデルを構築し、境界人としての社会内個人の、心理的な境界性の考察に資するとともに、境界人の理論の発展にむけての出発点とすることを目的とする。

以下、モデルの構築にむけて、まず予備的な考察を行ない、より視点を絞りこんでいくものとする。

III. モデル構築への予備的考察

1. 基本的前提の提示

具体的なモデル構築作業の始点として、最も基本となる前提の提示と、それに対応した概念用具の準備をする必要がある。本論文では、以下の点を基本的、かつ暫定的な前提として設定し、ここから議論を組み立てていくものとする。

1. 人間は「自我」を持つ存在である。

2. 人間の「認知的世界」の変化は、自我の変容をもたらす要因となる。
3. 人間は「刺激に対して「意味付与」を行ない、それを「シンボル化」することによって、与えられた刺激を選択し、再構成し、修正することができる能動的存在」(船津 1976, 12 頁)である。
4. 人間は、自分と社会との「ズレ」を認知するが、それを統合して処理し、環境との均衡を維持しようとする機構を有する。

2. モデル構築の留意点

以上の前提のもとでモデルを構築するにあたって、留意すべきと考えた主な視点を示す。

1. 個人的・社会的要素の双方の内包

モデルの仮想する人間像が、社会性を欠落した「真空中の原子」的な存在でも、社会決定論的な「人形」でもない、ということが必要である。

2. 社会とのズレが常態であるという含意の内包

自分と社会とのあいだには、ズレを認知することがむしろ一般的であり、それらが全く整合的である、すなわち、個人と社会とが完全に調和的な状態にあることは不可能である、という前提で考える。そこで、人はそのズレに動機づけられた内的外的なコミュニケーションへと導かれる。

3. 動機要素の内包

心的過程の変化をもたらす要因として、動機要素を内包することを重視する。従来のモデルには、この点への配慮が稀薄である。

4. 「記号」の関連の内包

人はいわば「記号を用いる動物」であり、社会・文化に関する事象には、「記号」とその体系が、何らかの形で深く関与している、と考える。心的過程を議論するうえで、この「記号」の関与を重視するものとする。この視点については、その重要性に比して議論が少ない。

5. 「ラベリング」の枠組の内包

他者とのコミュニケーションにおいて、直接的なラベル付与がなされる場合がある。このラベル付与の意味をモデルに組込むことによって、議論の対象となる領域を拡幅することは、今後の発展において重要な意義を有するものとする。

6. 「汎用性」(広範な領域への応用可能性)の内包

例えば、「異文化適応」というと留学生や外交官、商社員や帰国者に特有の問題と捉えられがちだが、自分とは異なる価値観や生存の条件を基に生きている人たちと関係を作っていく作業、すなわち適応とはすべての人々が日々の

生活で関わっている営みであると言える」(巖谷 1986, 51 頁)といった指摘のように、異文化の問題を議論するにあたって、日常生活との連続性を考慮することには意味がある、と考える。すなわち、特定の場面、特定の文化間だけでなく、ある程度広い範囲に適用しうるような、汎用的な性質を帯びたモデルの構築を志向すること、これを重視するものとする。

3. 「次元」の導入

(1) 認知要素の設定

ここでは、上の前提における「認知的世界」および「自己と社会とのズレ」を表現し、記述するための「道具」を設定する。

まず、移行した環境における任意の対象Xと、その移行先社会の人々の存在を想定する。そのうえで、以下の各々への回答にあたる認知要素を、 P_1 、 P_2 、 P_3 と定義する。

1. 「あなたはXをどう思うか？」
2. 「社会の人々はXをどう思うか？」
3. 「あなたがXをどう思っていると社会の人々は思っているか？」

(あなた(の考え)を社会の人々はどうみるか?)

P_1 、 P_2 、 P_3 をそれぞれ「1次」「2次」「3次」の認知要素とし、個人の認知的世界の構成要素と考える。このとき、各「次元」要素間のズレをもって、自己と社会との非調和を表現する指標と考えるものとする。

なお、この P_1 、 P_2 、 P_3 は、全てが存在しうるとは限らない(とくに P_3) ことに注意する必要がある。ただし、モデルの構成においては、より幅広い事態に対応するため、最大限に考えて議論する。また、この次元構造の入れ子状の階層性から、無限の高次過程(P_4 、 P_5 、 \dots)を考えることができるが、実質この次元までで充分と考える。

(2) 要素間の非整合性の意味

レインは、「自分たちが大多数の人々の考え方と一致しているかどうだろうかといったことや(第二のレベル)、大多数の人が自分たちを同じ仲間だと見なしてくれるかどうだろうかといったこと(第三のレベル)は多くの人々にとっておそらく重要なこと」(Laing 訳書 1973, 85 頁)と述べている。 P_1 、 P_2 間のズレは第二のレベルに、 P_2 、 P_3 間のズレは第三のレベルに対応すると考えると、 P_1 、 P_2 、 P_3 間の示す「自己と社会とのズレ」も、多くの人々にとって重要なこととなりうる、と考えてよいであろう。

もちろん、そのズレが当人にとって持つ重要性や、もたらす衝撃度等については個人差がある。しかし、周囲の社会に「なじまない」状況の表現にあ

たって、この指標は、ある程度の妥当性を有するとみて、以下の議論を展開するものとする。

(3) 既存の議論における認知要素

レイン (1969) およびシェフ (1967) においても、対社会の認知要素が構想されている。しかし、前者には、本論文の目的に対しては、上記の引用文を越えた議論は見当らない。また、後者は個人内の認知構造ではなく、集合現象的な「コンセンサス」に重点を置いている。したがって、社会内個人の意識構造、とくに「境界人」としての心的過程に関する議論としては、ともに充分ではないといえる。

また、認知要素間の非一貫性を、移行者の意識形成過程と結びつけたモデルは数少ない。認知要素間の非一貫性を視点にする、という点では、本論文での議論は、いわゆる認知的斉合性理論に分類される。しかし、不均衡と自我との関連を論ずるものであり、要素間の不均衡の逡減に主題を限定するものではない。この点で、認知的斉合性理論のみに分類されるものではない。

次に、「自己概念」の一貫性に関しては、「理想的自己」と「現実的自己」との差(discrepancy)などに焦点を当てた議論がある。本論文での認知要素間のズレは、これらの議論におけるものと比べ、「次元」という視点を設定することによって、自己と社会との関係性、とりわけ非調和性を強調したものと考えることができる。

IV. 異文化環境における個人の心的過程モデル

1. アイデンティティ構成過程モデル

前章までの予備的考察に基づき、「異文化環境における個人の心的過程モデル」として、「アイデンティティ構成過程モデル」(図1)を構築した。

次節以降において、解説を加えるものとする。

2. レベル間の心的過程

(1) レベル1からレベル2 —— 環境認知と意識励起 ——

文化の異なる環境に移行したとき、人は環境に対して「敏感」になる。いわば問題的状况におかれたことによって、人の内省活動は活発化する。世界を自明視できなくなり、周囲の他者への「志向」が高まり、より高次元の認知を欲するようになる。すなわち、自己の存する世界、ここでは異文化社会の人々に対する、高次元の認知要素が起生するものと考ええる。

「個人が、新しい社会環境におかれた場合、それが、これまでに育ってきた社会の文化と異なったものである場合に、その異和性を認識することによ

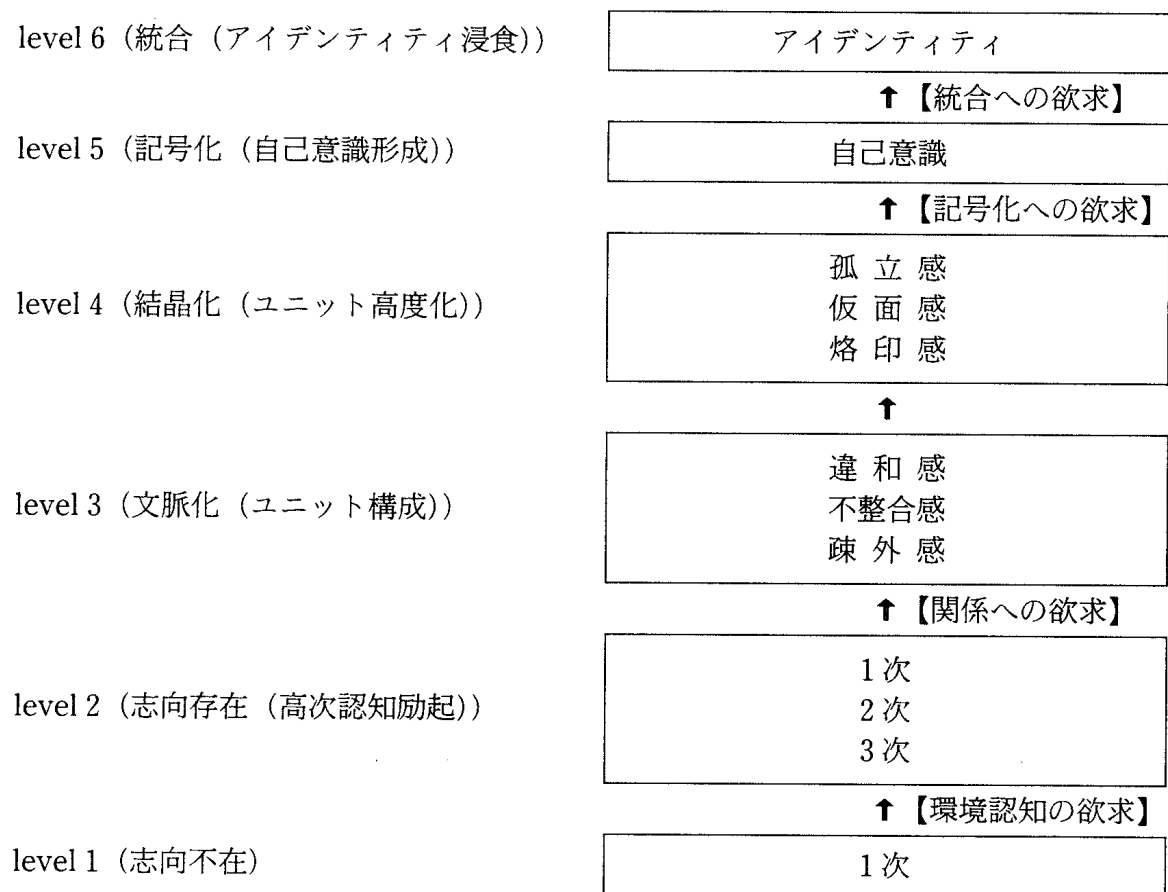


図 1 アイデンティティ構成過程モデル

って、それに対する心理的な反応を起すと同時に、その認識の内容に従い、特定の態度や行動をとるという現象」(近藤 1981, 81 頁)の始点として、意識のいわば「励起」状態を考えるのである⁴⁾。

(2) レベル 2 からレベル 3 —「自他関係定位的ユニット」の形成 (1) —

1) 認知要素の文脈化

意識の励起によって生じた各次元の認知要素間に、完全な一貫性(整合性)が存在することはありえない。それらの間には、必ずやズレが存在する。そのとき、各次元の認知要素は、ズレたまま独立に存在するのではなく、自己と他者との関係性への欲求によって、相互に連結=関連づけられ、いわば「文脈」化あるいは「ユニット」化される、と考えるべきであろう。このように、自己と社会との関係定位的な概念として、いわば「自他関係定位的ユニット」を導入することで、はじめて社会内個人の意識を論ずることができる、と考える。

2) 文脈のパタン

各要素の連結のパタンは、次の 3 つによって示されるものと定義する。

1. 「違和感」

1次(P₁)と2次(P₂)とのズレのもたらすものであり、「自分はこう(+)だが、他者はそうでない(-)」といった、自己と他者との「不一致」や「不都合」の感覚である。

2. 「不整合感」

1次(P₁)と3次(P₃)とのズレのもたらすものであり、「自分はこう(+)だが、他者からはそうでないとみられている(-)」といった、他者からの視線を組込んだズレの感覚である。すなわち、「被誤解感」ともいうべきものである。

3. 「疎外感」

2次(P₂)と3次(P₃)とのズレのもたらすものであり、「他者は一般にはこう(+)だが、自分は他者からそうでないとみられている(-)」といった、他者一般の中で自己が「外に置かれた」という感覚である。いわば、「被拒絶感」に近い。

(3) レベル3からレベル4 —「自他関係定位的ユニット」の形成(2)—

1) 結晶のパタン

時間的経過などにより、各次元の認知要素は、より高度に構造化され、ユニットは「結晶」化する、と考える。この「結晶」には、次のような3つの要素がある。

1. 「孤立感」

不整合感(1次-3次)は無く、あるがままの自分の理解はされているが、違和感(1次-2次)と疎外感(2次-3次)が有り、社会との不一致感や仲間外れの感覚が残る。いわば、「よそもの」であることを「自他共に認める」という感覚である。

2. 「仮面感」

疎外感(2次-3次)は無く、仲間として認められている、という感覚は有るが、違和感(1次-2次)と不整合感(1次-3次)が有り、社会との不一致感や被誤解感が残る。すなわち、仲間として社会に溶けこんでいるが、実際には周囲とは異なる方向にある、という型である。いわば、「隠れた」あるいは「仮面をかぶった」という感覚である。

3. 「烙印感」

違和感(1次-2次)は無く、社会との直接のズレは感じないが、不整合感(1次-3次)と疎外感(2次-3次)が有り、被誤解感や仲間外れの感覚が残る。すなわち、意識の中では社会に同調的なのだが、周囲からはそのように見て

1次	2次	3次	「違和感」 (1次-2次)	「不整合感」 (1次-3次)	「疎外感」 (2次-3次)	結 晶
+	-	+	有	無	有	「孤立感」
-	+	-				
+	-	-	有	有	無	「仮面感」
-	+	+				
+	+	-	無	有	有	「烙印感」
-	-	+				

図 2 ユニット・モデル

もらえない、また仲間としても見てもらえない、という型である。いわば「烙印をおされた」という感覚である。

2) ユニット間の構造的関係

以上の概念化から、認知要素の組合せによる「自他関係定位的ユニット」の構造を整理して示すと、「ユニット・モデル」（図2）のようになる。

カルチュア・ショックの議論などでしばしば用いられる、様々な「……感」の概念や、自他関係定位的な概念の多くは、このようなモデルを通して分類できるのではないかと考える。

従来の議論では、「違和感」のみが強調される傾向、すなわち「被視性」の視点が欠落する傾向があった。また、異文化移行者の「仮面性」や「烙印性」などは、独立に指摘されることはあっても、その構造的性について議論されることは、ほとんどなかったといえる。

きわめて操作的であるが、上のように定義することで、構造的に議論することが可能になり、また用語の無用な混乱を回避することができるであろう。

3) アイデンティティの動揺

無数に形成された「自他関係定位的ユニット」は、アイデンティティを揺さぶり続ける。この振動によってゆらぎ、不安定化したアイデンティティは、変容・更新（あるいは逆に反発・硬化）へのレディネスを有するようになる。そのユニット群が、どれほどアイデンティティ全体を動揺させることに寄与するかは、そのユニットの性質、他者へのコミットメント、個人の性格的側面、アイデンティティの個人史的な形成過程、などの間における緊張関係に依存する。

さらに、このアイデンティティの動揺は、次の2つの過程を促進する。ひとつは、新たな認知要素の励起とユニットの形成であり、この過程は再び新

たな動揺を生じさせうる。この「ポジティブ・フィードバック」の過程によって、はじめの小さなズレが膨張していく。新たなユニットのもたらす緊張が、徐々に凝集し、堆積していくのである。

もうひとつは、後述する「記号探索」過程である。無数のユニットの凝集と堆積のなかで曖昧化しつつある自己を、記号化の過程を通して定位しようとするのである。

(4) レベル4からレベル5 —— 自己の「記号化」 ——

1) 記号の探索過程

「人間にとって自分の体験を秩序づけ、説明することは不可欠な精神的欲求」(長島 1973)である。さらに、「人間は、自分の周囲の世界だけでなく、自己についても抽象化、記号化し、自分の心のなかで考えるという過程にとりつかれている」(ハヤカワ 訳書 1972, 51 頁)のである。

人は状況とその中の自己とを、「記号化」することで説明可能なものにしようとする欲求を有する。そこで、「いま、ここ」に在る状況的な自己についても、「状況定義」を通じた自己の記号化欲求に基づく、記号の探索機構が作動するものとする。それまでに形成され、凝集し、堆積したユニット群は、内的な記号探索とその構成に際し、その「領域」を方向づけ、限定する機能を有するのである。この過程に基づいて形成された「記号化された状況的自己」を、(狭義の)「自己意識」とよぶことにする。

ここで注意すべきことは、個人の主体的な記号探索過程も、教育や経験から習得された記号体系の社会性、文化性、そして時代性に枠づけられている、という点である。この枠を通じ、社会構造は主体に深くくい入っているのである。

なお、この「探索—記号化」過程に際し、レベル4(結晶化)の段階は、省略されうる。例えば、強い違和感と「目につきやすい」記号が存在する、といった場合である。すなわち、モデルに示した段階の一部は、縮減されるのである。

2) 自己の混沌化の恐怖

前述のように、アイデンティティの動揺は、無数のユニットの「凝集」「堆積」との循環的なシステムを構成する。それは、自己の混沌化への恐怖を与える。

「われわれは意味不明のものに対したとき——その知覚像が明確な意味をもたないとき——甚だ落着かない気持ちになる」(石原 1982)のである。さらに、「人間はまわりの情報を一貫性のある統合的で予測可能な体系、あるいは意味

ある図式にまとめあげようとする欲求をもっているが、その体系が脅かされるときに不安が生じる」(種田 1988, 182 頁) のである。こういった議論は、「自己」に対しても適用することができると思う。

ところが、自己とその在る状況は、記号化が不可能なことがある。旧文化において習得された記号体系や、そこでの知識に依っては、また、無数のユニットによる感情的な動揺のなかでは、異文化環境に在る自己を、定位できないことがあるのである。

自分が「得体の知れないもの」になることほど恐ろしいことはない。それはときに急激なパニックを喚起し、カルチュア・ショックの一因になるものと考えられる。

(5) レベル 5 からレベル 6 —— アイデンティティの変容 ——

1) 自己意識の浸食とアイデンティティの再構成

振動による動揺が、アイデンティティの衝撃吸収(緩衝)能力の臨界点を越える場合に、自己意識の浸食が生じ、アイデンティティの変容・更新がなされていくものと考えられる。すなわち、浸食してきた自己意識の統合作業によって、アイデンティティは再構成・再体制化されるのである⁵⁾。後述するが、この再構成の過程において、新たに中核的な位置を、否定的、逸脱的な意味を内包する自己意識が占めるとき、次なる問題が発生するのである⁶⁾。

2) ラベリング過程

前章において述べたように、認知要素の励起等の過程だけではなく、他者から直接にラベルを付与される過程をも考慮する必要がある。ここでは、他者から付与されたラベルに対し、本人の認知および解釈の過程を経たものは、「自己意識」の一種である、と考える。すなわち、前項までに示した、認知要素の励起—ユニット形成—記号探索の過程よりも、受動的かつ直接的な過程をも考慮する、ということである。このように考えることによって、社会的なラベル付与と自己ラベリングの議論を、モデルに組み込むことができる⁷⁾。

付与に対する解釈の過程で喚起された動揺のなかで、自己意識化したラベルの内容は、ときに急激にアイデンティティに浸食する。いったん浸食すると、中核化することで、ガン細胞のように古いアイデンティティを組織化していく。そして、そのラベルに方向づけられた新たなアイデンティティが生ずる、という場合が想定しうるのである。この過程の進行は、本人の自我だけでなく、歴史的・社会的に構成されてきた含意や、付与の状況、社会的脈絡、当事者間の権力関係、対抗文化の存在、といった諸要因の間の緊張関係に依存するものと考えられる。いわゆる「殺し文句」は、この過程を即座に

遂行する機能に優れている。抗し難い権力の下で、制度に基いて付与される
とき、それは最大の「殺傷能力」を発揮する。

3) アイデンティティの拡散

浸食がなされても統合がなされないとき、すなわち、再構成不能のとき、
アイデンティティは拡散の傾向を有するようになる。そして、「近代的アイデ
ンティティのこの未確定性は、心理的緊張をはぐくみ、人を、他人が彼をど
のように定義しているかということの変化に異様に左右されやすくする」
(Berger, Berger & Kellner 訳書 1977, 86 頁) のである。

この拡散したアイデンティティのもたらす緊張を、一挙に収束させるもの
として、イデオロギー、あるいは宗教への急激な関与が想定される。曖昧な、
しかし個人の多様な豊かさを含む枝葉部分と引換えに、アイデンティティは
一貫性を取りもどすものと考えられる。

次に問題とすべきは、いわゆる「否定的アイデンティティ」の獲得である。
自己の混沌化の恐怖が、逸脱的な場所すらも、つかのまの避難所 —— と
きに脱出不能となる——とさせてしまうのである。「ほとんどの場合、自己レ
ッテル貼りは緊張を緩和しようとする試みである」(Rotenberg 訳書 1986,
116 頁)。どんなラベルでも、自分に貼ることさえできれば、拡散したアイデ
ンティティのもたらす、「宙ぶらりん」状態の緊張は緩和される⁸⁾。まさにそ
の選択ゆえに、別の新たな緊張が生ずるとしても、なのである。

いずれの場合にせよ、自己の再秩序化の欲求の沸騰に対し、緊張緩和のた
めに応急処置を施した結果である。その副作用として生ずる様々な問題への
考察は、今後の重要な課題となる。

(6) アイデンティティの硬化

次に、アイデンティティの変容とは逆の過程、すなわち「硬化」について、
さらに微視的に考察する。

アイデンティティの急激な動揺に対し、緊張を緩和するひとつの方向とし
て、旧時点での明示的な自己像への回帰がある。まだ変容していない、旧時
点で保持されていたアイデンティティを硬化させ、それに強くしがみつくと
によって、安定を保とうとするのである⁹⁾。

問題は、この回帰後にある。深く実感された、そのアイデンティティから
見れば、現在の自己の在る社会は、しばしば「仮の場」と映る。そこで、周
囲への壁を自ら設定することにより、なじめなさに伴う緊張は緩和される。
なじもうとする意志を喪えば、なじめなさに悩むことはなくなるからである。
しかし、緊張緩和と引換えに、周囲に対する「かたくなさ」がもたらされる

ことになる。問題は、このかたくなさが、自分をアウトサイダーとあらしめる周囲の他者に対する反感、そして社会的関係の遮断へと、しばしば転化しやすい、ということなのである。そこでは、心理的な壁と、疎隔化による実体的な壁とが、相互に補強しあう循環が形成されていく。自己の在る社会環境に決してなじもうとせず、周囲を軽蔑しつつ暮らす人々、ある種「租界」的なコミュニティの形成 —— 等々の問題は、この視点から考えることができる。

もうひとつの問題は、いわば「地図と現地」(ハヤカワ 訳書 1972, 56 頁)、ここではアイデンティティと自己の関係にかかわるものである。アイデンティティを硬化させ、一時的な緊張緩和を得るとしても、自己はそのままの状態に留まらず、常に変化し続ける。そこで、「個人の意識のなかでのみその〈真の自我〉として客観化されるにすぎない幻想的なアイデンティティ」(Berger & Luckmann 訳書 1977, 291 頁)の問題、あるいはハヤカワのいう「自己欺瞞」の問題が生じてくる、と考えられる。そのアイデンティティでは、現実には全く対応できない場面が訪れることがある。悲しいことに、人はそれでもなお —— ときにはそれが幻想であることを「知って」いてさえ —— そのアイデンティティに、しばしばしがみつき続けるのである。その欺瞞自体がまた新たな欺瞞の上塗りを要求する、という循環から抜け出すことは、容易なことではない。それは幻想に逃げこんでまで回避した現実と、逃げ続けた自己の脆弱への直面を要求するのである。

(7) 心理的境界性との関連

異文化環境における心理的境界性の要因については、各々の段階において示してきたが、再びまとめて整理する。

a. バランス理論的緊張

ユニット形成による、認知要素間の不協和、不均衡のもたらす緊張であり、バランス理論の主題にあたるものである。

b. アイデンティティの動揺

a の衝撃による動揺である。それは、新たなユニットの形成を促すことで、a の緊張をさらに生じさせ、また c の記号探索過程を促進する。アイデンティティは、変容または硬化へのレディネスを有するようになる。

c. 自己の記号化不能

状況的な自己の記号化失敗による、自己の混沌化への恐怖である。

d. アイデンティティの拡散

再構成の不能に伴う緊張である。混沌化という視点は c と共通である (た

だしdは脈絡的な無秩序化である点で、やや異なる)。

これらの要因はシステムの関連しあい、いわば共振することで、ときに急激な動揺を喚起する。また、心的過程に関連する二次的問題として、以下のものがある。

a. 否定的アイデンティティの形成

否定的な自己意識の浸食—中核化や、上記dに対する全体性回復の試行による否定的アイデンティティ形成に伴う問題であり、逸脱論の重要な対象領域である。

b. 社会的関係の疎隔化・遮断

アイデンティティの硬化、あるいは非社会的なアイデンティティへの変容による、対社会的関係からの疎隔化・遮断に伴う問題である。

c. 幻想的自己の現実的対応不能

現実から目をそらすことによるアイデンティティ維持の結果、現実への対応が困難になることに伴う問題であり、精神医学から文学まで、広い領域で繰り返し対象とされてきたものである。

なお、aにおけるアイデンティティの否定性の深化、bにおける社会的関係の疎隔化、cにおける自己の幻想性の深化、において、問題の深刻性が再生産される、というポジティブ・フィードバックの機構が、重要な役割を果たす。

また、これらの諸要因、諸問題間の従属的關係とタイム・ラグが、環境への適応の経時的パターンや、カルチュア・ショックの「波状的性格」(近藤1981,81頁)の一部を説明するのではないかと考える。

(8) 過程的概念としてのアイデンティティ

心的過程は、あるレベルでとぎれるのではない。変容の有無を問わず、再びそのアイデンティティの持ち主として、環境との新たな接触をおこなう。モデルの心的過程は、再び下位レベルへと螺旋状に回帰し、無限に、また連続的に循環するものと考ええる。

以上の過程を、ユニットの構成するシステムに着目して、モデル化を試みたのが、「認知要素システムフェイズモデル」(図3)である。

社会のなかに存在する、ということは、世界像を揺るがせられるということである。そのような前提で考えれば、アイデンティティは変容の過程を免がれることはできない。無限の、連続的な循環の中で、日常の内的外的なコミュニケーションの営みの中で、アイデンティティは弁証法的な再構成を繰り返す。こうした意味で、アイデンティティとは、まさしく「過程的概念」

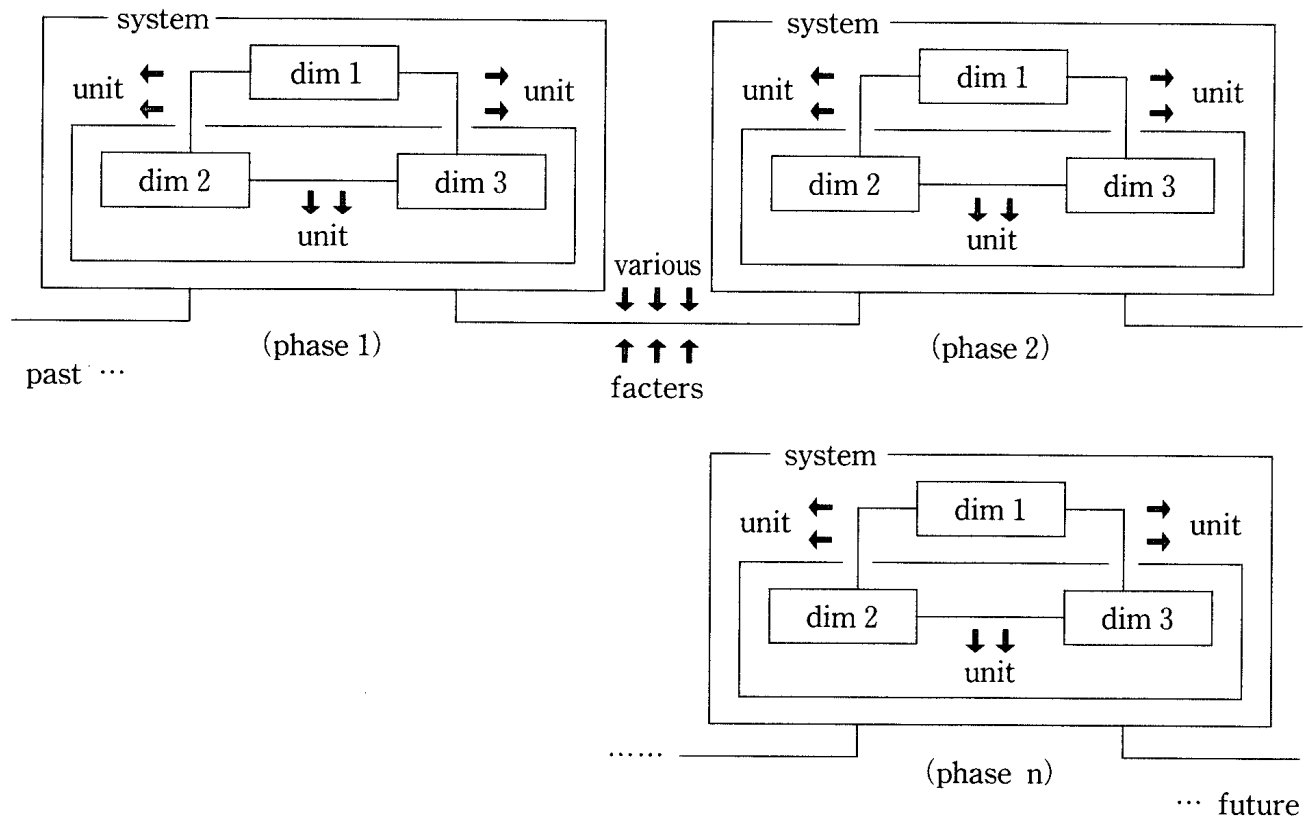


図 3 認知要素システムフェイズモデル

(草津 1977) なのである。

3. モデルの限界と課題

「境界人」の理論の発展にむけて、議論の軸としての心的過程モデルを提出してきた。モデルの構築と展開により、目的の基本的な部分は、とりあえず達成されたものと考えているが、多くの問題と課題が残った。その主なものを以下に示し、今後の課題としたい。

1. 「他者」への志向

本論のモデルにおいては、志向する対象となる他者の多元性や、その間の対立・矛盾、さらに他者へのコミットメントの程度、「重要な他者」(significant others) の影響等に関する議論は組み込まれていない。これらの点については、主観的な他者の影響を議論する、多くのマス・コミュニケーション研究と課題を共有する。

2. 認知要素の符号

モデルにおいては、各次元要素は「+」または「-」で示されているが、その「強度」、例えば「++」と「+」(あるいは「--」と「-」) の区別については議論していない。

3. 適合する人間像

本モデルに適合する人間像は、自我を持ち、混沌を恐れ、意味を求め続ける、いわば「近代的自我」である。このことから、主体となる人々——例えば、「子供」——へのモデルの適合性、すなわち前提とする人間像についての考察が要請される。これについては、多くの自我論と課題を共有する。また、モデル化に必然的に伴うものとして、モデルの全過程における個人差とその要因の問題も同時に考慮する必要があるだろう。

以下は、本論文の枠組に関してはこれを越えるが、理論の発展のうえで重要な課題である。

4. 認知の正確性とマス・メディア

本論では、あくまで本人の主観的世界の構成を問題としてきた。そのため、高次認知の客観的な正確性については論じて来なかった。そもそも、「多元的無知」(pluralistic ignorance)などの領域の、多くのコミュニケーション研究は、この「正確性」こそを主題とし、そのうえで認知の「歪み」(bias)等について議論してきた、とあってよい¹⁰⁾。この正確性の問題、および(認知的世界の構成材料を提供するものとしての)マス・メディアによる世論形成¹¹⁾——「世論操作」を含む——の問題は、今後の課題となる。

5. 主観主義的アプローチ

本論文は、個人の主観的・認知的世界に議論を限定してきた。しかし、例えば渡辺(1987)が、カルチュア・ショックの有無と現地の人との関係に関して論じたように、主観的な心理的境界性と、客観的な社会的関係の状況とは、必ずしも対応しない。また見田(1978)が、「疎外」を疎外「感」の問題に解消するアプローチの愚を示したように、主観的な視点から語りうることの限界を認識する必要がある。本論をよりマクロな議論と併用、あるいは統合して議論する方法論を確立することが課題となる。

6. 主体的な境界性の選択

人は、境界的な位置へ「追い込まれる」だけではない。主体的あるいは能動的な境界人と受動的な境界人がありうるのである。社会的には逸脱的な位置も主体的に選択されうるものであり、それが目的となることさえある。多くの革新者たちは、この過程を経て現れる。この主体性への考察が課題となる。

V. おわりに

本論文では、異文化環境における「境界人」としての個人の、認知要素励起からアイデンティティの変容(または硬化)に至る心的過程モデルの構築を通して、社会内個人の力動的な意識の様相について考察してきた。モデル

の構築と展開においては、「次元」概念を導入し、さらにラベリング論、一般意味論等の関連領域に言及しつつ議論した¹²⁾。

本論文のモデルは、あくまで理論の発展の出発点にすぎない。また、きわめて限定的なものである。より総合的な「境界人」理論の発展にむけて、前章で示した様々な課題を解決していくと同時に、多方面の現実への適用を通して、モデル自体を再構成し、修正していかなくてはならない。

寄りかかるべき意味の世界を喪ったまま、無数の小さな「とげ」(＝ユニット)に刺され続け、拡散したアイデンティティを抱えて彷徨することは、現代人にとって、一種不可避なことかもしれない。そう考えるとき、「痛覚」の麻痺や鈍磨の傾向、そして宗教への傾倒が、重要な視点として立ち現れてくるであろう。

現代人を、何らかの意味での「境界人」あるいは「アウトサイダー」と捉える視点は、新しいものではない。しかし、それでもなお、この領域への接近の必要性和意義が減ずることはない。恒常化したアイデンティティの危機状況、複雑化する社会的環境への不適応、自己の在る環境に対し「なじめない」、あるいは「なじまない」多くの人々の存在 —— 等々は、その境界性を通して、今後も考察が続けられなければならない。

注

- 1) 本論文において「文化」は、あらかじめ厳密に操作化することを避けているが、それは、汎用性と今後の発展を考慮しての方針である。したがって、ここでは最も広義に考えるものとする。ゆえに、「異文化」が「外国」のみを意味するものではないことは言うまでもない。
- 2) 1.および2.については、箕浦(1987)の指摘に依る。
- 3) 異文化の問題一般に適用できる概念やモデルを志向することについては、否定的な意見も想定しうる。しかし、少なくとも現在の段階では、抽象的な、また一般的なモデル構築にも、十分意義があると考ええる。
- 4) このような過程においては、いわゆる「選択的接触」の機構が関連する。人は自分に都合のよい認知を抱くものであり、この機構によって環境とのバランスを取ることが可能な場合もある。しかし、異文化環境においては、この機構だけでは十分に処理しきれない事態が生ずるものと考ええる。
- 5) 本モデルのアイデンティティ変容の過程は、「現存の構造を「つくろいながら」あらたな問題を解決し、その構造を保持していくプロセス」(松園1982, 130-131頁)、すなわち「文化変容」の議論における「内旋」(involution)と機構的な類似性を持つ。
- 6) 例えば、「仮面感」に導かれた「偽善者」という自己定義がありうるが、それは本人にとって二重の苦痛をもたらすものとなりうる。ひとつは、その発覚の

リスクの問題も含め、実際には社会に対してなじんでいない、ということにおいて。もうひとつは、その仮面性に伴う「不誠実」の自覚——この自覚において苦痛を感じるのはむしろ「誠実」であるがゆえである、という逆説が存在する——において、である。自己嫌悪、とくに青年期におけるものの一部は、後者に深くかかわるものと考えられる。仮面の与える緊張という代価、他の誰からも反作用が加えられないがゆえに感じる欠落感や罪悪感の皮肉、そして、その状況での「神」の存在の意味——等は、今後も重要な視点となろう。

- 7) 本節および次節の議論は、ローテンバーグがラベリング論に欠落する視点として指摘した、ラベル(=レッテル)を貼られた人がそのラベルを内面化しない理由、および社会的な反作用に先立って自己ラベリングが生じる過程、の一部を説明するであろう。さらに、「そもそもいかなる社会的レッテル貼り理論であれ、社会的過程に伴う自己レッテル貼りの特性を分析するための概念枠組みを備えていないものは、不完全なのである」(Rotenberg 訳書 1986, 111 頁)という指摘にも対応するものとする。
- 8) このように心的過程を考えると、発展として次のような仮説を考えることができるであろう。
 1. 「新人類」「モラトリアム」「ピーター・パン」「異星人」等々といった、青年たちへの無数のラベルに対し、しばしば嫌悪を示しながらも、それらを最も「歓迎」し、最も「必要」としたのは、実は当の青年たちではなかったか。次々と提出されるラベルの裏に見え隠れする、商業的な、あるいは操作的な「匂い」に苦笑いしつつ、それでもなお、これらにしがみつかるをえない、という皮肉を通してこそ、ラベルの氾濫現象を説明できるのではないか。
 2. 「境界人」「異邦人」「アウトサイダー」等々といったラベルの持つ魅力——本人だけでなく「研究者」にとっても——は、どんな領域において「外」に在るのか、を曖昧にしたままラベルとして通用する、という適応可能範囲の広さ、すなわち領域の非特定性によるのではないだろうか。「落ちこぼれ」は勉強という領域におけるラベルであり、「前科者」は犯罪という領域におけるラベルである。これらは、比喩的使用の場合を除き、その領域を明示する。しかし「アウトサイダー」といったラベルは、領域を特定しない。何かに対して「内側」にないということだけを示す。加えて重要なことは、これらには「孤独」(loneliness)「傷つきやすさ」(vulnerability)等の感傷的な属性の連想、という共通の側面があることである。
- 9) 「回避型適応」(江淵 1986, 10 頁)等の概念は、この「硬化」過程によるアイデンティティ保持に関連するものと考えられる。
- 10) 例えば、オゴーマン(1979)等による「保守的な歪曲」(conservative bias)の議論がある。
- 11) 本モデルはこの点において、「沈黙の螺旋理論」(Noelle-Neumann 1984)との接点を有する。
- 12) 自己像の状況的要素と持続的要素との力動的関係を考える点では、本モデルはターナー(1968)に依拠している。しかし、社会との非調和性や心理的境界性の強調、ユニットの設定と整理、記号への配慮、ラベリング論等の導入など、

多数の視点において異なるものである。

〈参考文献〉

- Berger, P. L., Berger, B. & Kellner, H., *The Homeless Mind—Modernization and Consciousness*, (New York, Random House Inc., 1973), 高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳『故郷喪失者たち』新曜社, 1977 年
- , & Luckmann, T., *The Social Construction of Reality—A Treatise in the Sociology of Knowledge*, (New York, Anchor Books, 1967), 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社, 1977 年
- Erikson, E. H., *Identity and the Life Cycle*, (New York, International Universities Press, Inc, 1959), 小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房, 1973 年
- 江淵一公「異文化適応のメカニズム——文化人類学的考察——」(『教育と医学』34-10, 慶応通信, 1986 年, 4-11 頁)
- ハヤカワ・S. I., *Symbol, Status and Personality*, 1963, 四宮満訳『言語と思考』南雲堂, 1972 年
- 褒岩ナオミ「メタ的な生き方のすすめ」(『教育と医学』34-10, 慶応通信, 1986 年, 51-56 頁)
- 船津 衛『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣, 1976 年
- 石原岩太郎『意味と記号の世界』誠信書房, 1982 年
- 梶田叡一『自己意識の心理学』(第2版) 東京大学出版会, 1988 年
- 近藤 裕『カルチュア・ショックの心理』創元社, 1981 年
- 草津 攻「アイデンティティと社会」(『現代社会学』7, No.4, Vol.1, 講談社, 1977 年, 32-53 頁)
- Laing, R. D., *The Politics of Experience and The Bird of Paradise*, (Middlesex, Penguin Books, 1967), 笠原嘉・塚本嘉壽訳『経験の政治学』みすず書房, 1973 年
- , Phillipson, H. & Lee, A. R., *Interpersonal Perception: A Theory and a Method of Research*, (New York, Springer, 1966)
- 松園万亀雄「文化摩擦とインヴォリューション (内旋)」, (大林太良編『文化摩擦の一般理論』巖南堂書店, 1982 年, 123-143 頁)
- 箕浦康子「異文化接触研究の諸相」(「文化と人間」の会編『異文化とのかかわり』川島書店, 1987 年, 7-36 頁)
- 見田宗介『新版 現代日本の精神構造』弘文堂, 1984 年, 52 頁
- 森 莞治「非行処遇過程と同一性形成の問題——処遇におけるレイベリングとアイデンティティ——」(『調研紀要』40, 1981 年, 35-63 頁)
- 村田雅之「異文化間コミュニケーションにおける認知主義モデルの提言」(高橋順一・中山治・御堂岡潔・渡辺文夫編『異文化へのストラテジー』川島書店, 1991 年, 145-160 頁)
- 長島信弘「カルチュア・ショック」(『教育と医学』21-4, 慶応通信, 1973 年, 61-67 頁)
- Noelle-Neumann, E., *The Spiral of Silence: Public Opinion—Our Social Skin*, (The University of Chicago Press, 1984), 池田謙一訳『沈黙の螺旋理論』ブレー

ン出版, 1988 年

O'Gorman, H. J., "White and Black Perceptions of Racial Values", *Public Opinion Quarterly* 43,1979,Pp 48-59

Rotenberg, M., *Damnation and Deviance: The Protestant Ethic and the Spirit of Failure*, (Free Press, 1978), 川村邦光訳『逸脱のアルケオロジー』平凡社, 1986 年

Scheff, T. J., "Toward a Sociological Model of Consensus", *American Sociological Review* 32,1967, Pp 32-46

種田真砂雄『認知精神医学序説』金剛出版, 1988 年

Turner, R. H., "The Self-Conception in Social Interaction", in Gordon, C. & Gergen, K. J. (eds), *The Self in Social Interaction*, (New York, John Willy & Sons, 1968, Pp 93-106)

渡辺文夫「異文化教育とその問題点」(「文化と人間」の会編『異文化とのかかわり』川島書店, 1987 年, 37-66 頁)